「主体的・対話的で深い学びを目指した道徳指導の一試み」
―特別支援学校での「探究の対話（ｐ４ｃ）」を活用した授業実践を通して―

宮城県立船岡支援学校　教諭　八嶋　貴彦

１　はじめに

（１）主題設定の理由

今回の学習指導要領改訂の要の一つが，道徳の教科化である。教師が内容項目に沿った価値観を教え込むのではなく，生徒自らが考え，議論する道徳の在り方が問われている。それは，特別支援学校においても例外ではない。

本校は肢体不自由の児童生徒のための特別支援学校である。小学部から高等部までの児童生徒がⅠ類型（教科を主とした教育課程），Ⅱ類型（領域・教科を合わせた指導を主とした教育課程），Ⅲ類型（自立活動を主とした教育課程）の３つの教育課程に分かれて学習に取り組んでいる。在籍児童生徒は約６０名で，その約半数の３０名の生徒が寄宿舎を利用して生活しながら学校に通っている。

本校生徒の共通した実態として，「人見知りが強い」「話し掛けたり，会話を続けたりすることが苦手」「会話の内容を理解するのが難しいときがある」など，自分の言動に自信がなかったり，自尊感情が低かったりする様子が見られる。まひによる発語の不明瞭さから言いたいことが伝わりにくかったり，語彙や話合いの経験の少なさから会話が続かなかったりすることなどが主な原因として考えられる。

そこで，セーフティのある環境で，他者との対話を通して，いろいろな価値観について考えさせることや対話をすることの楽しさを感じさせたいと考えた。その方法として，道徳の時間に「探究の対話（ｐ４ｃ）」（以下「探究の対話」）を活用した授業を行った。

（２）「探究の対話」について

「探究の対話」（ｐ４ｃ＝philosophy for children）とは，探求の源泉である「問い」を大切にする学習方法である。生徒と教師が円座になり，対話を通して「問い」を掘り下げながら，互いの考えを深めていく。その学習スタイルの基盤は「何を話しても否定されない」「周りの人がしっかり話を聞いてくれる」という知的なセーフティを構築することにある。主体的・対話的で深い学びを通して，課題解決や自己の生き方について，考えていくことは，これからの教育において極めて重要なことであり，生徒が主体的に道徳性を育むことにもつながると考える。進め方とルールは（表１）の通りである。

表１　「探究の対話」の進め方（左）と「探究の対話」のルール（右）

①生徒それぞれが問いを立てる。 ②みんなで話し合う問いを決める。 ③話合いのルールを確認する。 ④問いに対しての自分の考えをメモする。 ⑤対話を始める。 ⑦話合いを終えての自分の考えや感想をメモする。 ⑧共感できた意見や話合いを通しての気付きを発表する。	・コミュニティボールをもった人だけが発言できる。 ・考えが思いつかないときや話したくないときはパスできる。 ・他者を傷付ける発言はしない。

また「探究の対話（ｐ４ｃ)」についての理解を進めるために，平成３０年度と令和元年度の夏休みに２回，県内で「探究の対話（ｐ４ｃ)」の啓蒙活動を積極的に進めている宮城教育大学上廣倫理アカデミーの講師を招き，本校の現職教育として研修会を実施し，指導の共通理解を図る一助とした。

写真１　研修会の様子

平成３０年度は，自己紹介をしながらコミュニティボールを作りｐ４ｃのルールについてなど基本的な内容についての講義と演習を行ってもらった。

令和元年度は，実際に参加者で問いを出し，話合いの進め方やファシリテーターの役割についてのアドバイスをもらった。参加者はどちらも３０名程度。

（３）道徳の主題について

「探究の対話」の授業では，相互理解，寛容を中心価値として取り上げた。相互理解，寛容は，自分の考えや意見を相手に伝えるとともに，それぞれの個性や立場を尊重し，いろいろなものの見方や考え方があることを理解し，寛容の心をもって謙虚に他に学び，自らを高めていくことを目標としている。中学校の段階では，自分と他者の考えや意見の違いが明らかになることを恐れたり，考え方の違いから仲間だと思っていた関係に摩擦が生じたりして，悩み，孤立する場合がある。一方で，過剰に同調する傾向も生じやすく，安易に人の意見に合わせることで，現実から逃避したり，自分さえよければよいという考えをもったりすることもある。

中学校段階の特徴に加え，本校の生徒達は，自分の考えをまとめきれなかったり，自分の考えや意見に自信がもてなかったりして，伝えることに消極的な姿勢が見られる。そこで，「探究の対話」の手法を取り入れて，セーフティを基盤に，自分達で話し合ってみたい問いを立て，選択することで，考えを深め，相互理解を深める学習につなげていきたいと考えた。また，相互理解ばかりではなく，問いの内容によって様々な道徳的な価値について考えさせることができると考えた。

（４）目指す姿

道徳の授業において，生徒達が主体的・対話的で深い学びを得ることができるように次の４つを目指す姿とした。

・安心して他者と対話することができる。
・友達の話を聞いたり，自分の考えを話したりすることで，自己理解や他者理解を深めることができる。
・相手を受け入れたり，自分を受け入れてもらったりすることで，共感性や自尊感情を高めることができる。
・対話を通して，自分の考えを深めることができる。

２　研究仮説

「探究の対話」を用いたセーフティのある環境で，自分達が考えてみたい問いから対話を進め，いろいろな道徳的な価値に対して，友達の意見を聞いたり，自分の考えを話したりする経験を積み重ねることで，主体的・対話的で深い学びのある道徳の授業が実践できるのではないか。(図１)

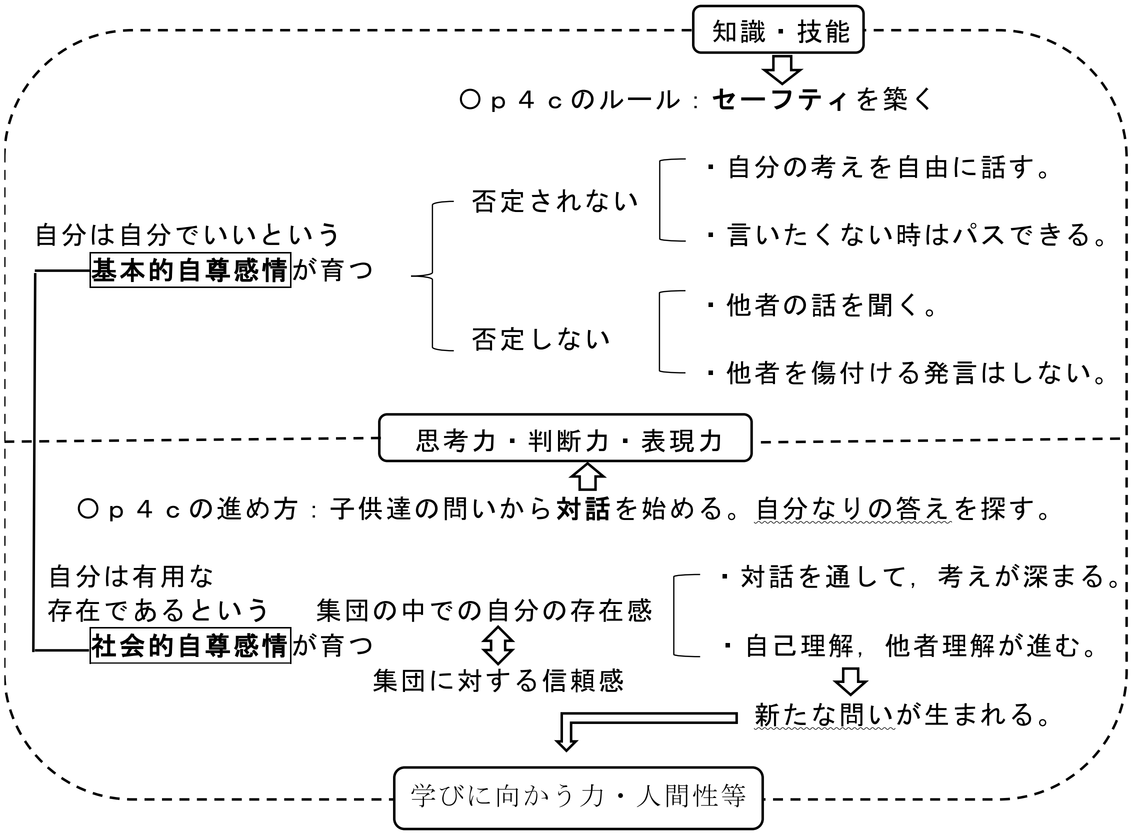

図１　「探究の対話」（ｐ４ｃ）学習サイクルのイメージ

３　研究方法

（１）指導計画と評価の工夫

・指導計画は年度毎に立てて実践した。

・評価は「振り返りシート」（表２）を活用し，アンケートと感想を記入してもらった。

表２　「探究の対話」振り返りシート

「深く考えよう，みんなの声に耳を傾け，ゆっくり話そう」振り返りシート

名前（　　　　　　　　　　　）

◎ココロの温度計（基準点を参考に点数を書きましょう）

１００：とてもリラックスしている。　　　７０：まあまあリラックスしている。

５０：緊張とリラックスの真ん中くらい。　４０：少し緊張している。

１０：かなり緊張している。　　　　　　　０：もうダメ・・・

・始める前（　　　　　）％　　　・今日の話合いを終えて（　　　　　）％

◎今日の振り返り評価基準

Ａ：とてもそう思う。　Ｂ：そう思う。　Ｃ：あまり思わない。　Ｄ：思わない。

①自分の考えを話せた。　Ａ　・　Ｂ　・　Ｃ　・　Ｄ

②友達の考えを聞けた。　Ａ　・　Ｂ　・　Ｃ　・　Ｄ

③安心して参加できた。　Ａ　・　Ｂ　・　Ｃ　・　Ｄ

④新たな発見があった。　Ａ　・　Ｂ　・　Ｃ　・　Ｄ

⑤また p4c をやりたい。　Ａ　・　Ｂ　・　Ｃ　・　Ｄ

＊今日の問い　（例）「普通ってなに？」

＊今日の問いについてのあなたの考え

＊友達の意見や考えで，あなたが共感できたり，発見があったり，いいなと思ったこと

＊あなたが見つけた今日のキーワード（感想）

・アンケート項目①②④は，聞く・話す・考えるなどコミュニケーションや認知スキル。項目③と授業前後に記入するココロの温度計は，言葉以外の適切な空気の読み方など非認知スキル。項目⑤は，主体的な態度の評価として，捉えることとした。

（２）「探究の対話」におけるセーフティのある環境作りの工夫

①多面的・多角的な話合いができる人的環境の工夫

各学年・各クラスの生徒数が少ないことでの話合いの不活性化を避けるために，縦割り授業や学年合同授業，更に隣接する仙台大学の青沼教授の協力を得て，大学生を学校支援ボランティアとして派遣してもらった。

②導入の工夫

「みやぎアドベンチャープログラム」や「構成的グループエンカウンター」のアクティビティなどを導入に用いることで学習への不安や緊張の軽減を図った。

③教材の工夫

「探究の対話」で通常用いられるコミュニティボール作りを初回に行ったり，対話を補足する視覚支援としてホワイトボードや模造紙やメモ用紙を用いたり，ルールカードやＱカードなどの教材を活用することで話合いの活性化に努めた。

４　実践の概要　＜実施期間　平成３０年度～令和３年度（３年６カ月間）＞

（１）少人数学級への対応の工夫

平成３０年度のⅠ類型生徒数は，１年生２名，３年生１名であった。話合いを深めるための環境を整えるため，「探究の対話」の時間の４時間を，縦割り授業とした。また，大学生に学校支援ボランティアとして，毎回２～４名（計８名）参加してもらったことで，話合いに深まりが見られた。

令和元年度は，授業研究検討会の際の「Ⅱ類型の生徒にとっても『探究の対話』は有効な学習になるのではないか」という意見を受けて，Ⅰ・Ⅱ類型合同授業も設定した。学校支援ボランティアは毎回交替で１～２名ずつ計８回参加してもらった。

・Ⅰ類型１・２年縦割り授業：６回

・Ⅰ・Ⅱ類型２学年合同授業：４回

Ⅰ・Ⅱ類型生徒５名は，朝の会などを合同で行っていることもあり，抵抗なく授業に臨むことができた。生徒達は学校支援ボランティアに対して，初対面でも教師よりもずっと年齢が近いこともあり，親しみを感じやすかったと思われる。生徒達は，学校支援ボランティアからの温かい眼差しや頷きや発言により共感を得たことで，自信をもって，自分の考えを深め，発表することができた。生徒からも「いろいろな人の意見を聞くことができて楽しかった。」という感想が多く聞かれた。

Ｈ３０年度　第１回（９月）

Ｒ元年度　第６回（１１月）

写真２　「探究の対話」の授業の様子

令和２年度も，Ⅰ・Ⅱ類型３年生合同を基本として，在籍が１名のみのⅠ類型２年生も一緒に参加してもらうなど学校の実情に合わせて柔軟な対応を行った。コロナ禍の影響で，学校支援ボランティアに来校してもらうことは不可能となったが，オンラインで１回のみであったが大学生が１名参加してくれた。

令和３年度は，寄宿舎の余暇活動として「探究の対話」を行っている。事前に寄宿舎職員，生徒，保護者に目的と計画を連絡して了承を得て活動している。参加希望者が３名以上（教師を入れて４名以上）の時に実施するという方針で行い，１０月現在，計画通り４回とも実施できている。

Ｒ２年度　第２回（９月）　　Ｒ３年度　第２回（５月）

写真３　「探究の対話」の授業の様子

（２）指導計画と導入の工夫

特別の教科　道徳では，３５時間で２２の価値項目を扱う。各項目の時間配分は，各学校の特色を生かして，重点的に指導に当たる項目を選んでいくことになっているが，本校では生徒の実態から「相互理解，寛容」を重点的な指導項目として取り上げ，「探究の対話」の時間に扱うことにした。各年度の指導計画（表３）は以下の通り。

表３　各年度の指導計画

平成３０年度　本題材の指導計画（４時間扱い）Ⅰ（Ⅰ類型縦割り）

月日（類型）	・導入の活動 ・話合いのテーマ	参加生徒数（教師）	学校支援ボランティア
9/18（Ⅰ）	・コミュニティボール作り，スピードチェック ・「死んだらどうなるの」	３名（２名）	４名
10/16（Ⅰ）	・スピードチェック，ネームパス ・「大人ってどういう人」	２名（１名）	３名
11/13（Ⅰ）	・スピードチェック，フルーツバスケット ・「犯罪はどうして起きるの」	２名（２名）	２名
12/18（Ⅰ）	・スピードチェック，チャットカード，ブリッジ ・「ふつうってなんだろう」	３名（２名）	４名

令和元年度　本題材の指導計画（８時間扱い）Ⅰ（Ⅰ類型縦割り）Ⅰ・Ⅱ（Ⅰ・Ⅱ類型合同）

5/17（Ⅰ・Ⅱ）	・コミュニティボール作り，スピードチェック ・「宇宙人って本当にいるの」	５名（２名）	２名
6/10（Ⅰ・Ⅱ）	・スピードチェック，チャットカード，ブリッジ ・「もしみんなの鼻が長かったら」	３名（２名）	２名
9/ 2（Ⅰ）	・スピードチェック，チャットカード，ブリッジ ・「選択できれば本当に自由なの」	２名（２名）	２名
9/ 4（Ⅰ・Ⅱ）	・スピードチェック，他己紹介，ブリッジ ・「どうして挨拶を返してくれない人がいるの」	４名（２名）	２名
10/21（Ⅰ）	・スピードチェック，質問ゲーム，ブリッジ ・「かなわなくても希望って大事なの」	２名（２名）	１名
11/11（Ⅰ）	・スピードチェック，ＹＥＳ・ＮＯクイズ ・「お金と愛情，大事なのはどちら」	３名（２名）	２名

12/ 9 （Ⅰ）	・スピードチェック，ＹＥＳ・ＮＯクイズ ・「友達ってなに？」	３名 （２名）	１名
1/20 （Ⅰ・Ⅱ）	・スピードチェック，共同絵画，ブリッジ ・「幽霊や妖怪って本当にいるのかな？」	２名 （２名）	２名

令和２年度　本題材の指導計画（５時間扱い）Ⅰ（Ⅰ類型縦割り）Ⅰ・Ⅱ（Ⅰ・Ⅱ類型合同）

5/14 （Ⅰ）	＊オンラインで実施　・ネームパス ・「安心できるってどういうこと」	３名 （２名）	０名
9/29 （Ⅰ・Ⅱ）	・ネームパス ・「幸せは訪れてくるのか，つかみ取るのか」	４名 （２名）	１名
10/20 （Ⅰ）	・チャットカード ・「男子と女子の距離感はどれくらいがいい」	５名 （２名）	０名
11/24 （Ⅰ）	・チャットカード ・「ふつうってなんだろう」	５名 （２名）	０名
12/15	・チャットカード ・「ドラえもんって本当にいないの？」	５名 （２名）	０名

導入の活動は，対話の緊張を適度にほぐすために行ってきた。以下，導入の活動例。

・スピードチェック：対話の前後に，親指の傾きでお互いの緊張具合を確かめ合う活動。

・ブリッジ：問いに関連する語句をランダムに引いて，両極に「そう思う」「そう思わない」と書かれた直線上に置いていき，いろいろな感じ方があることに気付かせる活動。

・チャットカード：ランダムに重ねられた簡単な質問が書かれた札を引いて答える活動。

（３）教材の工夫

「探究の対話」では，教材としてコミュニティボール，話合いのルールカード，Ｑカード（問い返しのヒント），振り返りシートなどを使用してきたが，対話を進める中で，どんな発言があったかをすぐに忘れてしまう生徒への対応も必要になった。

そこで，黒板やホワイトボードに生徒や教師の発言をメモしたが，見えにくいなどの課題があったので，中央に円卓を置き，その上に円形に切った模造紙を乗せて，メモを取る方式にした。円卓は，友達の姿が隠れないように膝くらいの高さのものを使用した。円形の模造紙の上に置くメモは折り紙を円形に切り，教師が分担して発言をメモし，生徒に見えるように置いた。生徒自身にメモをさせるとまひなどにより書字に時間が掛かることもあり，対話に集中させることとした。この模造紙は，中央に線を引き，導入の「ブリッジ」にも使用した。（写真３）丸という形が，円座と調和し，効果的な視覚支援となった。

コミュニティボール

Ｑカード

円形模造紙・メモ

写真４　使用した教材

（４）継続していく中で出てきた課題への対応

平成３０年度と令和元年度は，私が中学部Ⅰ類型の担任であったので，他学年やⅡ類型の担任と相談しながら計画を立て実践してきた。

令和２年度は，Ⅱ類型のＡさんが医療的なケアの回数が増えたことでⅢ類型の所属となり，私が担任をすることになった。Ａさんのクラスが変更になる際に保護者から「できるだけ２年生まで一緒だったⅡ類型クラスの生徒との交流をもたせてほしい」という要望があった。またⅠ類型生徒からも継続して「探求の対話」の授業を望む声が聞かれたことで，５月中旬に Skype を使ったオンラインで１回実施した。更に学部内で相談をしてⅠ・Ⅱ（Ⅲ）類型生徒を対象とした合同の道徳の授業を４回計画した。また，コロナ禍の影響で臨時休業期間後も積極的に学校支援ボランティアを受け入れることが出来ない状況だったが，オンラインを活用して１回参加してもらうことができた。

令和３年度は，私が小学部Ⅲ類型の担当となったことで，道徳の授業は実施できない状況になったが，卒業生からのリクエストもあり，寄宿舎の余暇活動として舎監の日に「探究の対話」を行うことができないかを管理職，寄宿舎の職員と相談し了解を得た。寄宿舎の生徒・保護者に連絡と了承を得て，寄宿舎の行事（避難訓練など）と重ならない日に計８回計画した。

令和３年度　寄宿舎の余暇活動としての「探究の対話」（参加人数）

- 第１回（４／２５）「どうして勉強するの」（中学生４名，高校生３名）
- 第２回（５／２０）「生きるってどういうこと」（中学生３名，高校生７名）
- 第３回（６／１６）「恋愛と友情の違いって」（高校生５名）
- 第４回（１０／１７）「元気ってなに」（中学生２名，高校生２名）

余暇活動ではあるが，道徳的な価値に向き合って対話をするという基本的な方針は続けて行っている。

５　成果と今後の課題

（１）「探究の対話」を通して，安心して他者と対話することができた。

アンケート項目③「安心して話合いに参加できた」（図２～５）のＡ評価が多かったこと，授業の事前事後におけるリラックス度合いの変化（図６）でリラックスできる度合いが増えたこと，そして話合い中の生徒の表情から，安心して話ができる場面が増えたことを確認できた。

「探究の対話」のルールに沿った話合いをすることで，「自分の話を最後まで聞いてもらえる」「無理に話さなくてもいい」「自分も相手も尊重する」「参加者は対等な関係」など，生徒達がセーフティを意識するようになったことが大きな要因であると考える。

（２）対話を通して，友達の話をよく聞き，自分の考えを話す経験を重ねることで，自己理解や他者理解を深めることができた。

アンケート（図２～５）項目①②④のどの項目もＡ，Ｂ評価が多く，高い自己評価であった。特に「友達の考えをよく聞けた。」と「またｐ４ｃがやりたい」では，ほぼ全員がＡ評価で，意欲的に学習に取り組めていたことが確認できた。

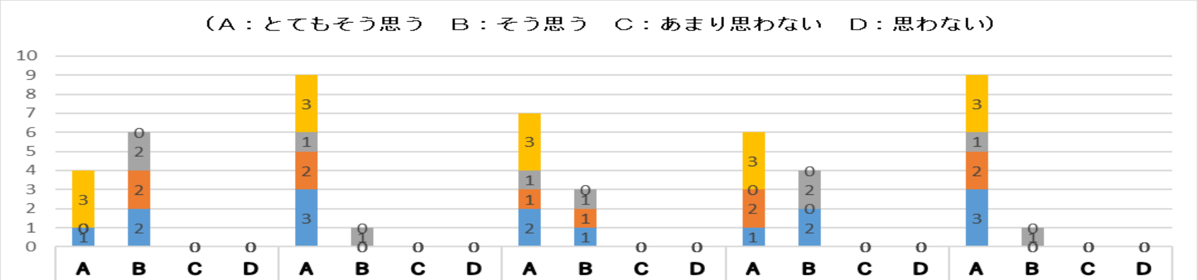

図２　平成３０年度「探究の対話」アンケート結果

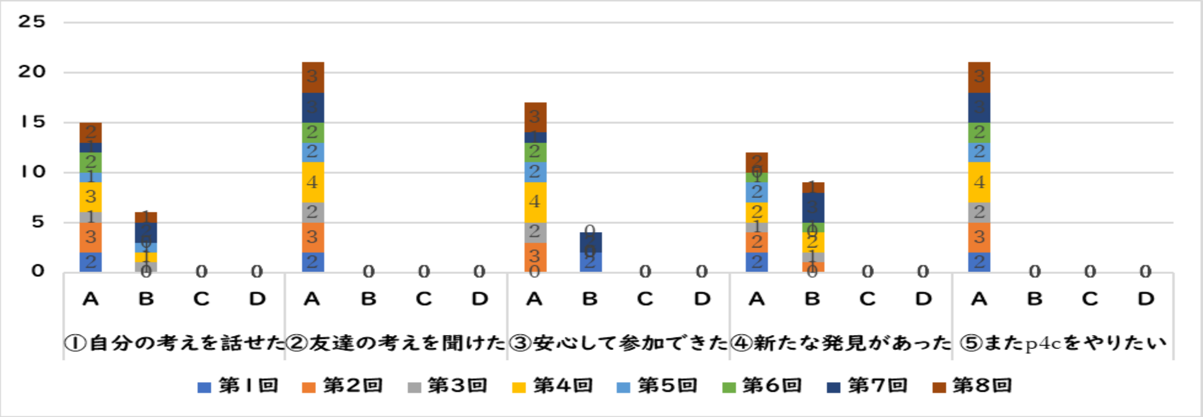

図３　令和元年度「探究の対話」アンケート結果

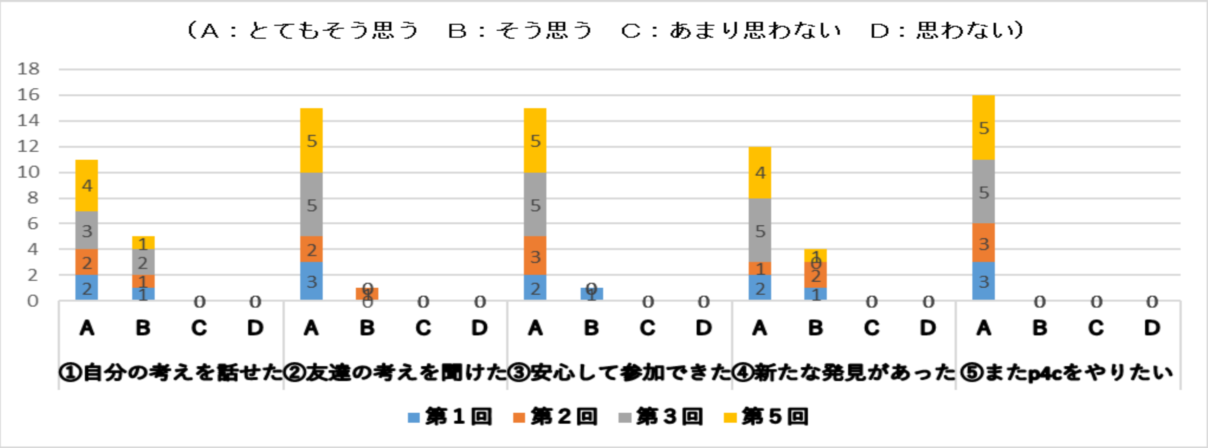

図４　令和２年度「探究の対話」アンケート結果

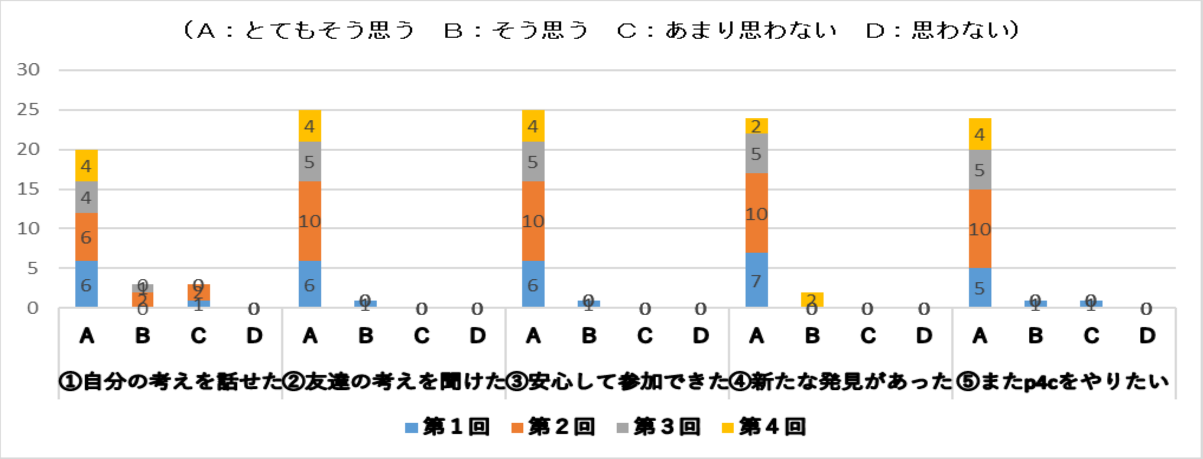

図５　令和３年度「探究の対話」アンケート結果

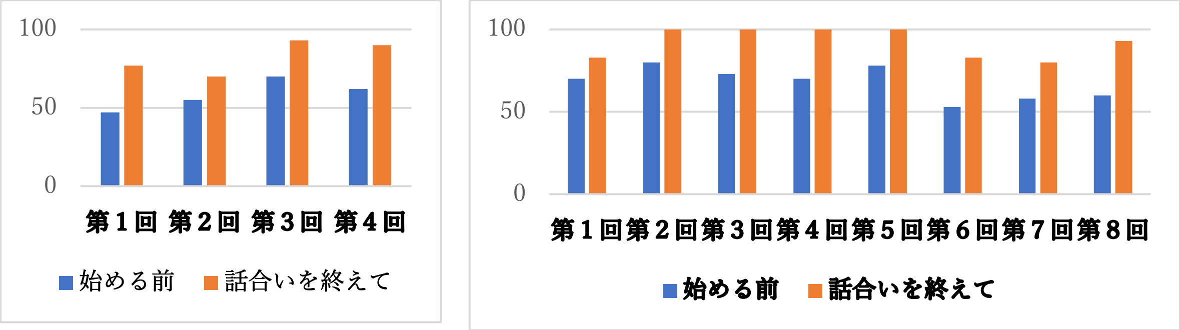

図６　リラックス度（平均値）の変化　左：平成３０年度　右：令和元年度

「探究の対話」の授業を重ねていく中で，人見知りだったＡ君が，自分から学校支援ボランティアの大学生に質問したり，まひにより発音が不明瞭なＢ君が，最後まで聞いてもらえる安心から発言が増えたりと，意欲的な姿が多く見られるようになった。

生徒の感想（表４）も最初の頃は「楽しかったです」という短文だったが，気付きや自分の考えなどを整理して書き込めるようになってきた。また，対話の中で友達の意見を聞いて自分の考えが変わってきたという発言も見られるようになってきたことから，自己理解や他者理解を進めながら「目指す姿」に少しずつ近付けたことが観察できた。

表４　生徒の感想（抜粋）

Ｈ３０年度 第４回「ふつうってなんだろう」 ・私は大人数がやっていることが普通だと思う。だからと言って，少人数がやっていることも普通じゃないとは言い切れない。普通の基準は人それぞれなので線引きが難しいと思った。いろんな人の意見が聞けてとても参考になった。
Ｒ元年度 第３回「選択できれば本当に自由なの」 ・選択肢の数が少ないほど自由じゃないと思っていたけれど，選択肢がたくさんあれば良いわけじゃないかもしれないと友達の意見を聞いて思った。
Ｒ２年度 第２回「幸せは訪れるもの，それとも自分でつかみにいくもの」 ・待っていても来るけれど，自分でつかみに行った方がより幸せ。失敗を生かすことによって幸せにつながる。
Ｒ３年度 第２回「どうして生きるのか」 ・今回のｐ４ｃに参加して本当に良かったと思う。自分のした体験と同じような体験をしている人が沢山いて，その人たちの体験を聞いて共感できることがいっぱいあった。

（３）「探求の対話」を通して友達の話を聞いたり，自分の話を聞いてもらったりすることで，共感性や自尊感情を高めることができた。

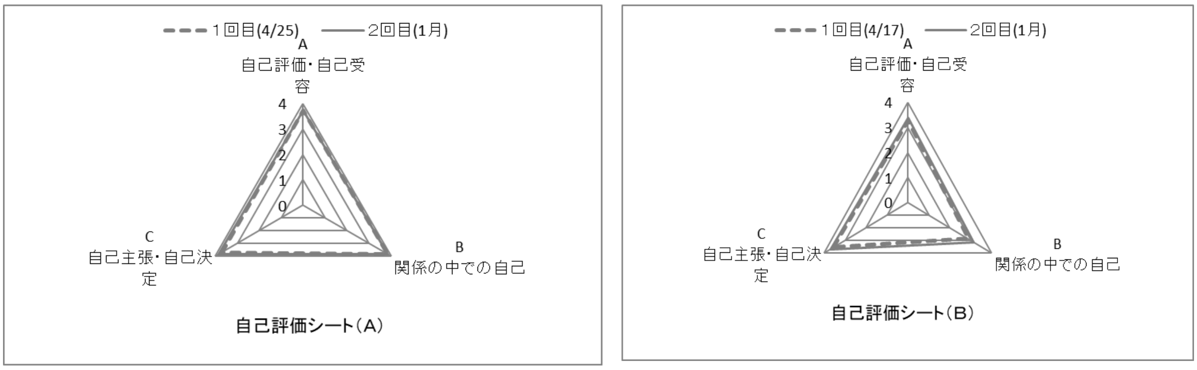

図７　令和元年度　自己評価シート

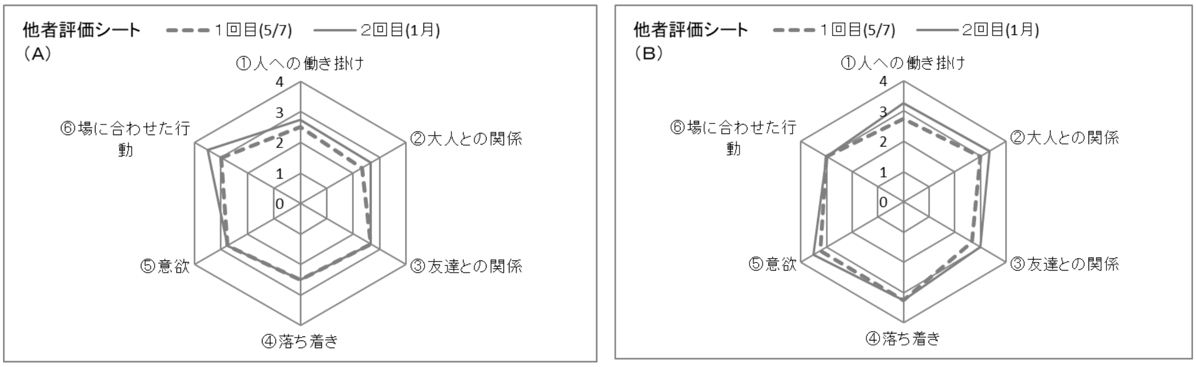

図８　令和元年度　他者評価シート

＊自尊感情の変化（「自尊感情測定尺度（東京都版）」東京都教育委員会資料より引用）

「探求の対話」の学習のみの成果ではないが，平成３０年度と令和元年度（図７，８）

の自尊感情測定尺度の結果から，自己評価も他者評価もあくまで個人内での差であるけれど，少しずつ評価が高くなっていることが確かめられた。Ⅱ類型の生徒達も概ね同じような結果が確かめられたことから,「探究の対話」が自尊感情や共感性を高めるのに有効であったと考える。

（４）対話を通して，自分の考えを深めることができた。

生徒の発言や感想文を読んでいく中で，教師の実感として毎回感じることができた。

生徒の考えを深める有効な手立てとして授業検討会やケース会で次の意見が出た。

【発問の工夫】生徒を引きつける導入の発問,身近な考えやすいテーマで考えが深まった。

【課題の順序性】他己紹介,ブリッジなどスモールステップで考えを深めることができた。

【ＴＴの役割分担】Ｔ２，Ｔ３が分かりやすいヒントを生徒に示していて，考えを深めるのに効果的だった。

【視覚支援，教材の工夫】円卓に模造紙を広げることで，生徒たちが必要に応じて，何度も見ることができるようになっていて良かった。

【安心できる学習環境の設定】安心できる柔らかいコミュニティボールなど，ｐ４ｃは話しやすい雰囲気作りに効果的だった。

また，子ども教育データサイエンスを推進されている宮城教育大学の田端教授の「子ども言葉データサイエンス入門」という著書から，文章の形態素（意味をもつ言語要素の最小単位）を解析することで，文章の難易度などを調べられることを知り，活用してみた。本研究では，日本語文章難易度判別システム（http://jreadability.net/）を使用した。同一生徒が参加した２回の比較結果が次の通り（表５）である。

表５　３名の生徒の感想文を形態素解析システム jReadability で解析した結果

月日 Ｒ２年	文章難易度	リーダビリティ・スコア	総文数	総形態素数（述）	総形態素数（異）
５月	初級前半	５．６９	６	６２	３４
１２月	中級前半	３．８５	４	９４	４７

このシステムは，もともとは日本語を母国語としない学習者向けに開発されたものであるが，日本語を母語とする学習者にも適応できるのではないかと紹介されている。リーダビリティ・スコアは数値が低いほど難易度が高いことを示し，総形態素数（述）は出てきた全ての形態素を示すのに対し，総形態素数（異）は品詞などの違いを示す。つまり語彙の豊富さを測る指標となる。話合いのテーマにより生徒の感想の長さが変わってくることも予想されるが，同一生徒による似たようなテーマでの話合いでも回を重ねる度に生徒達が考えを深め，内容の濃い文章を書けるようになる可能性があることを数値からも読み取ることができた。

６　まとめ

平成３０年度から令和３年度までの「探求の対話」アンケートを比較してみると,どの年度も,生徒達の自己評価が高く，あまり大きな違いがないことに気付く。どの生徒も「探究の対話」を通して，自己理解や他者理解を深められた結果ではないかと考える。

以上の成果から，特別支援学校においても「探求の対話」を活用した道徳の授業は，生徒が主体的・対話的で深い学びを実感できるアプローチの一つになると考える。

今後の課題としては,「探求の対話」の実践を草の根的に広げていくことと「探求の対話」の根拠のある成果を検討していくことが挙げられる。寄宿舎での後半の余暇活動「探究の対話」も含め，今後更に実践の幅を広げながら,得られた知見を広めていきたい。

＊本稿は，本人・家族の承諾を得て，掲載しています。

【参考文献】
「中学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編」文部科学省　教育出版　2018
「子どもたちの未来を拓く探究の対話『ｐ４ｃ』」ｐ４ｃみやぎ出版企画委員会著　東京書籍　2017
「子どもと倫理学ー考え，議論する道徳のために」フィリップ・キャム著　萌書房　2017
「子どもの言葉データサイエンス入門」田端健人著　パイデイア出版　2021